

## 学院大と教員生活

|       |                                                                                                                 |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-05-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 杉山, 康仁<br>メールアドレス:<br>所属:              |
| URL   | <a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/297">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/297</a> |

# 学院大と教員生活

杉 山 康 仁

## 1. はじめに

教員生活30年目を迎えるにあたり、東北学院英学史年報で、学院大と接点を持ちながら続けてきた教員生活についてお話する機会を頂き光栄に感じております。

## 2. 大友賢二先生との出会い（八戸北高校時代）

卒業後にはじめて出会った学院大に係わる教員は大友賢二先生でした。もちろん直接の指導をうけたことはありません。昭和61年、教員スタートの年、臨時講師として勤務した八戸北高校が県の高教研外国語部会の事務局でした。研究大会の講演のため来県した大友先生を会場（弘前南高校）周辺に案内することになりました。学院大のOBと知り、話しかけたときに、「最近の学院大は頑張っているのか？自分は学院大を誇りに思っているのだから、お前も頑張れ！」と声をかけていただきました。英語教育のリーダー的存在であった先生からの叱咤激励に身の引きしまる思いでした。この言葉がひとつの励みとなり、今日まで研鑽と修養を欠かさない教員生活を送ることができています。

## 3. 新採用となって（八戸西高校時代）

卒業後、初めて連絡を取った先生は英文学演習を担当してくださった柴田良孝先生でした。3年生のクラス担任をしたとき、自分のクラスに学院大を希望している剣道部員がいました。剣道部顧問の柴田先生の顔が浮かび、すぐに連絡を取りました。ありがたいことに柴田先生からその生徒に対する進路指導のアドバイスを頂くことができました。

さて、当時の勤務先の授業は相変わらず文法訳読式が主流でしたが、ALT（当時AET）の導入が青森県でも始まり、新たな動きが生まれようとしていました。学生時代に受けたジェイムズ・ヴァーダマン先生の英会話の授業や高田諭先生のLL演習などが役に立ちました。

教員時代の初期、英語の指導に関して最も影響を受けていたのは、4年次の米文学演習で指導を受けた遠竹護先生の授業でした。特に、先生の準備してくださるレジメ（プリント類）は授業の予習を取り組みやすいものにしてくれま

した。そしてそれは高校の現場においても効果的であり、生徒の自学をさらに促進するものでした。後に青森県の事業により、弘前大学の修士課程に派遣されたときに出会った学生が、このレジメを手にとって、感心すると同時に、このような指導を受けたかったと話していたことを思い出します。大学院では英語教育がメインでしたが、学院大で学んだホーソンにまた挑戦しました。遠竹先生には多方面から刺激を頂きました。

大学での担任は志子田光雄先生でした。修士課程の手続きの際には、いろいろご面倒をおかけしました。最後に学院大学構内に入ったのが、ちょうど、志子田先生の最終講義の日でした。学生時代の友人を誘って、我々が学生のときにはなかった階段教室でその最終講義を受けました。先生のご専門の一つである John Donne のフレーズを使い、卒業生の結婚式で挨拶をしたことが思い出されました。

#### 4. 学院大への思い（三沢高校英語科時代）

教諭として2つ目の勤務校は青森県内の英語科のある学校でした。まさに自分が英文科を目指したように、将来、英語と付きあっていきたい生徒が多くいました。ここでも大学でのイベントが役に立ちました。自分は参加できませんでしたが学院大時代アーサイナス大学への海外研修に参加した仲間から、その経験はとても意義のあるものだと聞いていました。ツールとして英語を使える機会を与えたい、また、この有意義な体験をさせたいという思いから修学旅行先を海外に変更しました。ここでは3度卒業生を出しましたが、母校には10人以上入学しています。もちろん希望者はその数倍おりましたが。

このころまでには英語教育での実践研究がかなり注目をあびていて、私もその方面の研修をさせていただきました。この三沢高校時代には、科学技術振興会の研究費を2度頂いております。

#### 5. 学院大との繋がり（現任校、八戸高校にて）

現任校に赴任してはや11年が過ぎようとしております。新学習指導要領になり、ますます自分を磨くことの重要性を強く感じています。また、学院大から先生方が青森県にいらっしゃるときには積極的に会合に参加しております。特に英文科の先生方が八戸にいらしたときはとても嬉しく、その場に集まった同門でこの地区で活躍している教員の方々との出会いがまた自分を奮い立たせてくれました。支部会に村野井仁先生がお越しになったときは、八戸みろく横丁

で親交を深めることができました。村野井先生の著書は既に読んでいましたし、将来の日本の英語について色々お話したことがよい刺激になりました。

残念ながらこれまでの勤務校とは違って、我が母校に進学する生徒はとて少ないのが現状です。最も進学者の多い学校はお隣の東北大学です。更に残念なことにこの学校は予備校的な性格を強く感じる学校でもあります。それでもなお、英語の重要性、学ぶことの楽しさなどは、常に伝えて行きたいと思っています。

文科省委託事業の研修会に参加したとき、大学時代のクラスメートに再会しました。この時は3週間に及ぶ研修会でしたが、このように高校・中学問わず同門の英語教師が活躍する場面に出会うことが多くなっています。このような時は特に、学院大に進んでよかったと心から思います。

## 6. 学院大に望むこと

現在、新学習指導要領のもと新たな取り組みをしている中で、国の求めるものと現場での実情の狭間でゆれています。

新カリキュラムの教科指導を始めて、半年が過ぎ、授業形態、流れ、生徒の反応も定着してきました。生徒にいかに関英語を使わせるかを考えることが楽しくなっています。そこで、学院大には、数多くの英語教員を輩出している大学としての意識を更に強くしていただき、素晴らしい人材をこれからも送り込んでいただきたいと思います。そのためには学生が進んで学べる環境を更に整備し、例えば4技能を伸ばすための設備を充実させ、自由に活用できるだけでなく、それをアドバイスする教員が常駐すること、学生は図書館を24時間利用できることなど、進んで学ぶ学生に協力的な大学に更に発展していただきたいと思います。

また、とても都合の良いお願いなのですが、忙しい中でも英語教育の発展を願い、日々研修している中学・高校の先生方対象の研修会やそれぞれが研究・実践したことを気軽に発表できる場、研究紀要のようなものの充実も期待しています。

## 7. 終わりに

退職まで10年を切りながら、未だに英語を教えることを楽しんでいます。それも東北学院大学・文学部・英文科で培われた精神があるからです。学院大よ、永遠なれ！